

# 「菊」は自分自身

主幹教諭 中村 昌子

今年は9月の長雨、台風続きで菊の成育が心配されましたが、まもなく78回目の学校の誕生日となるきくまつりです。この数年、天候や気温の変化に悩まされ続きの菊作りですが、これも現代を生きる人間の責任として、自然との向き合い方を学びなさいと言う天からの課題と受け止めています。

本校の菊作りは、長年の積み重ねの中で、地域にお住まいの菊の先生のアドバイスや、教員たち試行錯誤のたまものとして、約半年間の菊作りのメニューが組まれています。

「赤玉土」「挿し芽」「芽摘み」「ねじりっこ」等等…。これは菊作りには欠かせないさまざまな材料、道具、また作業の一部の用語です。これが何のことかすらすら答えられれば大泉の菊作りに精通したと合格点がもらえるでしょう。たぶん、高学年の子どもたちはきっと答えられるはずですよ。

さて、児童会活動の中で委員会活動があります。4年生の2学期からスタートし、学校の中でさまざまな仕事を分担して活動しています。放送委員会、保健委員会等と聞くと大人の方なら「ああ、自分もかつてはやっていたなあ」と思い浮かぶことと思います。その中に本校独特の「菊委員会」と「畑委員会」があります。菊作りや畑の活動の準備や、夏休みの水やり当番など、縁の下の力持ちとして支えてくれています。勿論すべての委員会がさまざまなところで活躍していることはご承知の通りですが、今回はきくまつり間近と言うことでこの2つの委員会をご紹介します。かつては、「園芸委員会」としてこの2つの仕事を統合した形で頑張っていました。余りに仕事の負担が大きく、2つに分割したという歴史があります。

かつて創立50周年のきくまつりのときに、当時の園芸委員会委員長だった児童がこんなすばらしい挨拶をきくまつりのときにしてくれました。

「この学校の校章のマークに菊が使われていますが、どうしてかなと考えたことがありますか。それは大輪は大きく伸び伸びと、小菊は小さくてもこまごまとまめに…そんな思いがあると思います。自分で育てた菊の花を見て今までのことをふりかえてみましょう。私は大輪のようにできたかな、ほくは小菊のようにできたかな、というような反省ができればいいですね。今、わたしたちが育てている菊は自分自身なのです。水やりをしなければ菊が枯れ、自分の心も枯れてしまうかもしれませんね。菊を自分だと思って育てましょう。」

一人一人の菊には一年間の菊作りの思いが詰まっています。でも上手に育てよう、きれいな花をさかせようということばかりに気持ちがむいては本来の菊作りのめあてからそれていってしまいます。菊作りは結果ではなく、その過程が大切なのです。一生懸命世話をしても自然が相手ですから、病気や菊そのものの個体の弱さで枯れてしまうこともあります。でも真摯に菊と向き合えば、その体験はその子にとって大きな糧となるはずですよ。逆に結果として素晴らしい花が咲いたとしても、世話をする過程で誰かに任せきりにしたり、人の力を借りていたとすれば、その菊作りで得たものはあまりないでしょう。

「菊は自分自身」この園芸委員長の言葉に込められた深い意味をこのきくまつりを機会に、皆で自分に問いかけてみてください。